

序 章

全国には約二〇〇ヶ所強の城跡が国史跡に指定されている。ここ二〇年間はほぼ毎年二〜三ヶ所の城跡が新たに指定を受けている。その大半は中世の城館跡である。近年では発掘調査や文献調査などの総合調査を実施し、その成果に基づいて指定を受ける方法がとられるようになった。

この総合調査では自治体によつて委員会が組織される場合が多い。私もそうした委員会に委嘱されることが多くなり、調査対象となる城館跡の総括となる原稿を執筆する機会が増えた。その結果、国史跡に指定された城跡も岐阜城、小笠原氏城館跡群、杵築城、烏帽子形城があり、市史跡としては私部城が指定を受けた。こうした報告書にそれぞれの城跡の特徴などを記したのであるが、報告書という性格上、ほとんど一般には目に触れることが少ない。しかし、個々の城跡の構造を城郭史上に位置づけており、以前よりまとめたいと思つていたところである。

そこで城館研究叢書の四冊目としてまとめたいのが本書である。ところで中世城館の構造については、東北や南九州には独特の構造を有するものが古くより知られていたし、さらに長く踏査を続けていると、東国と西国の築城にも違いのあることに気づかされる。選地、規模、構造などさまざまな点で、東国と西国には地域差を見出すことができるのである。また、戦国時代後半に山城に導入される石積みや石垣は、従来、極めて先進的で数少ない施設として捉えられていたが、近年の詳細な分布調査の結果、畝状壘堀群と同様、広範囲に、しかもかなり多くの山城に導入されて

いることが明らかとなった。ところが、この戦国期の石積みや石垣も信濃以西に認められるものであり、関東以北では極めて少ない。関東以北は基本的に土造りのまま戦国時代を終える。さらに興味深いことには、近世になっても関東以北の城郭では石垣をあまり用いない。これも従来は石材がないためだと言われてきたが、どうも土造りの近世城郭は、その築城者が関東以北出身の大名であり、彼らの築城意識のなかに石垣を用いるという意識自体がなかったと考えられる。こうした意識の違いがもたらす地域差は、城郭の本質を明らかにするために重要な視点となろう。本書では列島規模の比較には及ばないものの、西国を中心とした総合調査の論考を中心に編集し、西国の城館構造を明らかにしようとして試みたものである。

第1部 大名の城館構造では、湖北の戦国大名である浅井氏と京極氏の城館構造、さらには三好長慶の築城について分析を試みたものである。

1章 浅井・朝倉氏の同盟と城館構造は、従来、浅井・朝倉同盟と呼ばれる体制について再検討を加えたものである。自立した戦国大名領である浅井氏の領国内に朝倉氏が築城に関与していたことを示し、築かれた城郭の構造に越前の特徴があることを明らかにし、これを単に技術支援と捉えるのか、朝倉氏としては自領内と認識していたのかを分析する必要があると考えた。他国領を侵略して城を築く事例は武田氏の信濃における築城や、毛利氏の出雲における築城など数多くあるが、自立する他の大名領に築城をおこなった事例はそう多くはなく、この湖北浅井氏領内の朝倉氏による築城は極めて興味深い事例といえよう。

本章では記さなかったが、浅井氏の居城である小谷城へ元龜三年（一五七二）に信長との戦いの最中に朝倉義景が入城する。その際に本丸の為体（ていたらく）を見るにおよびそこに入らず、大嶽を改修して入ったと『信長公記』に記されている。現存する大嶽に認められる巨大な土塁や長大な堅堀は、義景の入城時に築かれたものと見られる。軍事

的緊張の下での改修ではあるが、他国の大名の居城を改修するという行為は、やはり同盟関係だけでは説明できない。

2章 京極氏の本城 上平寺城とその城下町―遺構と絵図からの再検討―は、従来ほとんど知られていなかった湖北の守護京極氏の居城である上平寺城を現存遺構と江戸時代の絵図から分析を試みたものである。近江の守護大名六角氏の居城観音寺城、湖北の戦国大名浅井氏の居城小谷城に関しては古くより調査、研究が進んでいた。ところが湖北の分郡守護京極氏の居城上平寺城については存在すら知られていなかった。なぜなら、標高669呎という高山に位置し、城跡全域が大人よりも背の高いクマザサに覆われていたため、人目に触れにくかったからである。そこで伊吹町教育委員会(当時)の高橋順之氏とともに踏査して縄張り図を作成し、遺構の分析を試みた。

さらには江戸時代前期の作成と考えられる上平寺城古図の描写と現地照合を試み、絵図が現地踏査の実施にもとづく極めて正確な描写であることを明らかにした。絵図の制作者が注目しているのは山城ではなく、山麓に構えられた館跡(上平寺館)や庭園であつて、京極氏の居館とその前面に戦国時代の城下町が存在していたことを描いている。絵図に描かれた城下町は後の発掘調査でも確認されており、庭園もほぼ遺構を留めていたために、中世の守護大名の居城と居館の構造を示す好事例として平成十六年度に国史跡に指定された。

3章 京極氏の陣城 霊仙山をめぐる山城は、多賀町と彦根市にまたがる男鬼入谷城について分析したものである。山城ブームで彦根の山奥にすごい山城があると噂になるほどの城跡であつた。実は一九八二年度より一〇九年をかけて実施された滋賀県中近世城郭分布調査でも報告されていない。もちろん従来知られていなかった城跡が現在でも発見されることはある。しかし男鬼入谷城のように大規模で、構造も三重堀切などを構えるものが発見されることはまずない。さらに注目されるのはその立地である。山深い立地は周囲から隔絶されており、街道や集落などを俯瞰することはできない。また、これほどの縄張りを持つ巨大な山城が一切記録に現れず、地元の伝承にも伝えられないのは異様である。そうした男鬼入谷城の特徴から霊仙山麓地域の戦国史を考えてみた。